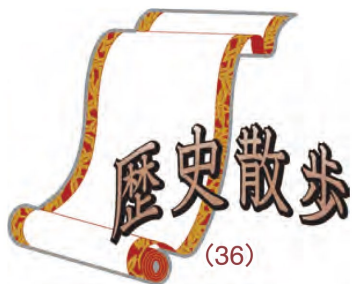


市指定史跡名勝

津偕楽公園



電車… J R ・ 近鉄津駅から徒歩10分

車…伊勢自動車道津 I C から車で10分

市内で桜の名所と呼ばれる場所は数々あるが、最も多くの花見客を迎えるのは津偕楽公園であろう。その歴史は江戸時代初期にさかのぼる。

もとは「下部田山」^{しもべたやま}「御殿山」^{ごてんやま}と呼ばれ、藩主の鷹狩り場であった。その後、藩士の功労をねぎらうため、土地を分け与えたという記録がある。眺望の利く場所で家臣の山荘が数多くあった。

幕末、11代藩主藤堂高猷^{たかゆき}は家臣の土地を買い上げ、ここに自然地形を生かした山荘造営を計画する。江戸下屋敷の染井別邸^{そめい}（現在の東京都豊島区染井）から庭師や植木職人を呼び寄せ、ひづめ形になった丘陵とその間の谷地形を利用して谷に水をたたえた「八橋の池」^{やつはし}を造り、野趣^{やしゆ}に富んだ庭に仕立てている。桜の名所となる原点はこの時で、江戸桜（ソメイヨシノ）をはじめ、紅葉や五葉松を江戸から取り寄せ移植している。

偕楽園の名称は、その扁額^{へんがく}が園内の建物に掲げられたことに由来し「人々が偕^{とも}に楽しむ」という意味から名付けられた。明治に入って国有地となり、その後「三重県公園」、本市に移管後は「津市公園」と変遷した。明治40（1907）年に開催された第9回関西府県連合共進会では、4月1日からの60日間に78万人の見物客でにぎわったといわれる。いま、公園内にかつての建物はなく、多くの記念碑が建立され往時の偕楽園からは様変わりしている。しかし、園内の桜は毎年変わることなくわたしたちの目を楽しませてくれている。

ことしも花びらの淡い彩りが暖かな風に揺れる季節となった。

（「広報津」平成21年4月1日号）

